

ひまわり



令和元年10月17日(木)

自衛隊という存在（災害派遣）



台風19号は、太平洋上で湿った暖気を大量に引き込み、発達しながら日本列島を直撃しました。そのため、記録的な豪雨をもたらし、河川の決壊など、東日本の広い範囲で大きな被害が出ました。これも地球温暖化がもたらした災害です。

お亡くなりになられた方のご冥福と、被災地の一刻も早い復興をお祈りします。

今週の全校集会で、消防・警察・自衛隊などが、被災地の最前線で活動していることを伝えました。とりわけ、自衛隊は都道府県知事の要請を受け、被災地での活動にあたります。皆さんにとって、消防や警察は身近に感じる存在です。しかし、自衛隊はそうではないかもしれません。そこで、今回は災害時の自衛隊の活動に焦点をあててみます。

平成23年、ジャーナリストの桜林美佐さんが『日本に自衛隊がいてよかったー自衛隊の東日本大震災ー』（産経新聞出版）を出版しました。この本のあある章に、東日本大震災時の福島第一原発での自衛官の決死の行動が記されていました。若い自衛官が言いました。「独身だから、家族持ちの先輩ではなく、自分を（原子炉の冷却作業に）行かせてください」このような発言が多く、隊員から聞かれたそうです。この言葉で表されるように、放射線の恐怖と闘いながらも、決死の覚悟で作業にあたる自衛官の姿が描かれていました。

また、以前、陸上自衛隊の幹部（陸将補）と話をさせていただいた時、次のように言っておられました。「国民の生命と財産を守るのは私たちの使命です。だから、どんな状況でも克服できるよう、日頃から訓練をしているのです」

この言葉を聞いた時、自衛官の使命の重さを感じずにはいられませんでした。

今回の台風災害においても、陸・海・空の自衛官は被災地の最前線にいます。

例えば航空自衛隊では、全国7つの救難隊から機材と自衛官を被災地に派遣し、救難活動にあたっています。日頃の訓練で培われた確かな技術と「他を生かすために」（救難隊のスローガン）の強い使命感をもって、最前線で活動しているのです。陸上自衛隊や海上自衛隊も、それぞれの持ち場で救難活動や捜索活動などを展開しています。このような自衛官の姿に頭が下がる思いがします。決して目立つことはありませんが、いざという時、私たちを守ってくれる組織の存在を知ってほしいという思いから、今回の「ひまわり」を書きました。

学校ホームページで、日々の教育活動のようすを公開しています。どうぞ、本校ホームページを閲覧してください。
【東住吉中学校】で検索



QR code

東住吉中学校HP → <http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=j742691>